

旧華族家資料目錄Ⅱ

立花種恭旧蔵史料目錄

# 立花種恭旧蔵史料目録

学習院大学史料館RA

西山 直志

前号（当館紀要第二三号、二〇一七年三月）に引続き、旧華族家の史料目録を掲載する。前号では近年寄贈を受けた富小路家・岡部家・稲垣家・木越家、これら四家の史料目録を掲載した。今号では、学習院創立一四〇周年を記念して二〇一七年秋に開催した当館特別展「黎明期の学習院―神田・虎ノ門のころ―」に際して調査を行った、立花種恭旧蔵史料を対象とする。

現在、これらの原史料は立花勝秀氏が所蔵されているが、本展覧会の終了後、学習院アーカイブズによってデジタルカラー画像の撮影が行われ、当館ではこの画像データを所蔵している。よって史料の公開は、この画像データにより行う予定である。

解説・目録の掲載に先立ち、史料目録の掲載を許可して下さった現史料所蔵者の立花勝秀氏、展覧会開催にあたって史料の所在情報を提供下さった霞会館理事長北白川道久氏、そして立花種則氏に深く感謝申し上げる。本目録の公開によって、明治前期の学習院や旧三池藩主立花家に関する研究が進展すれば幸いである。

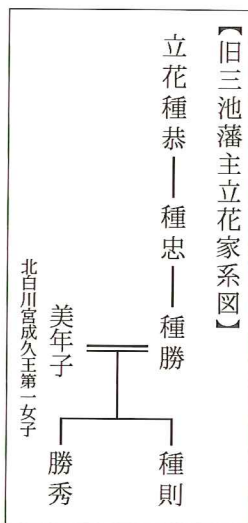
## 解題

### 1. 史料の概要と来歴

本稿で解説する立花種恭旧蔵史料（以下「本史料群」とする）は、初代学習院長・立花種恭の旧蔵によるものである。その多くは、華族会館による学習院の創設過程、および初代院長時代（一八七七年一月一七日～一八八四年五月二四日）に、立花が授受・作成したものである。

かつて本史料群は、『学習院百年史』（学習院、一九八〇～一九八七年）の編纂の際に利用されており、その後再度立花家に返却された。その際に作成された、本史料群を撮影したマイクロフィルムの紙焼き資料が、学習院アーカイブズに所蔵されている。

今回、学習院大学史料館の平成二九年度秋季特別展「黎明期の学習院―神田・虎ノ門のころ―」の開催準備にあたって、二〇一七年三月に改めて本史料群の所在調査を行った。すると、旧三池藩主立花家の立花種則氏が所蔵されていることが、霞会館を通じて判明した。そしてその後、四月に学習院大学史料館へ借用の運びとなり、六月までに筆者の手により仮目録



が作成された。その上で、秋季特別展において一部の史料を展示した。

本史料群は、大きく六つのまとまりに分かれて、総黒漆塗の木箱の中に保存されていた。この木箱には、北白川宮家所用の紋があり、また裏面には朱書で「高輪御殿」とあることから、種恭の孫・立花種勝（一九〇五～一九八四）の夫人となる北白川宮成久王第一女子の美年子（一九一一～一九七〇、一九三三降嫁）所用品と思われる（以下同様に、故人については敬称を省略させて頂く）。

また、昭和戦時期に編纂されたが未刊行に終わった「学習院物語」稿本に所収された種恭の長男・立花種忠（一八八〇～一九六三）の談に、次の一文がある。

学習院長としての父につきましては既に学習院史にも出て居りますこととで、別に私から申上げることもしませんが、まことに丹念な人で其の頃のことを書いた日記の中に学習院関係だけのものが一箱になつて居ります。これはまだ開いては見ませんがご参考になること、存じます。

この文中にある「学習院関係だけのものが一箱になつて居り」というのが、本史料群のことだと思われる。よって、昭和戦時期には既に一つのまとまりとして存在していたことが分かる。

なお、一部の史料には種勝の整理によるという紙片短冊（史料の概要が記される）が挟み込まれており、戦後の一時期に立花家内で一度整理が試みられたようである。この短冊は、前述の学習院アーカイブズにあるマイクロフィルム紙焼き資料に写り込んでいるので、その作成時期は一九七〇年代より以前のことと推定される。

## 2. 関連史料の所在

まず、本史料群以外の旧三池藩主立花家の文書については、三池カルタ・歴史資料館に所蔵がある。これらは、立花種勝が一九七三年に設立された財団法人三池郷土館に寄託していたものであるという。目録として『三池

立花文書・中島家文書目録』（大牟田市歴史資料館、二〇〇一年）があり、幕末から明治にかけての文書一七〇点がある。この中には、華族学校（学習院）創設準備に関する岩倉具視書翰や辞令類、学習院長退任時の感謝状なども含まれている。これらの史料をもとに、三池カルタ・歴史資料館では二〇一三年一二月から翌年三月まで、企画展「立花種恭～幕末維新を生きた最後の三池藩主～」を開催している。また近年、新たな史料も立花家より追加寄贈され、同館長の梶原伸介氏によって現在整理がなされている由である。

次に学習院大学図書館には、立花種恭の旧蔵図書で約五〇〇冊からなる「立花文庫」がある。この中には、古今和歌集、後撰和歌集、拾遺和歌集、後拾遺和歌集、金葉和歌集、詞歌和歌集、千載和歌集、新古今和歌集の写本（以上は貴重書）や、武術、書道、華道関係の文献が含まれている。

そのほか立花種恭関係の史料として、書翰類が岩倉具視関係文書などに存在するが、本稿では割愛する。

また周辺に目を転じると、立花宗家である旧柳川藩主立花家の史料が豊富に存在する（柳川古文書館所蔵）。それらの目録が、『旧柳河藩主立花家文書調査報告書』一～三（柳川市教育委員会・柳川古文書館、二〇〇二年）であり、立花種恭に関わる史料も含まれる。これらの史料は、同書の編纂を担った一人でもある内山一幸氏によって精力的に分析が進められている<sup>(4)</sup>。その他、博物館での展示や、自治体史などでも活用されている<sup>(5)</sup>。

## 3. 旧蔵者の経歴

立花種恭の経歴は以下の通りである<sup>(6)</sup>。（これ以降の年代表記は、利便性の観点から史料の表記に近づけるため、和暦を用いて、段落の初出に西暦を併記した）

天保七年（一八三六）二月二八日、立花種道の長男として江戸深川に生まれる。嘉永二年（一八四九）、陸奥下手渡藩二代藩主・立花種温の死去により養子として跡を襲い、三代藩主となる。文久二年（一八六二）に大

番頭、翌年に若年寄となり、さらに慶應四年（一八六八）に老中格・会計総裁となるなど、幕府の要職を務めた。幕領の半分が筑後三池にあり、戊辰戦争では藩論が分裂し、下手渡の陣屋が焼失した。これにより、三池に移る。明治二年（一八六九）六月に三池藩知事となるが、同四年七月の廢藩置県に伴い免職となり東京に移住した。

明治七年（一八七四）六月に発足した華族会館では、当初から主要構成員であった。明治八年一〇月に華族が一二部に分けられると、第九部の特選議員となる。さらに明治九年一月一九日、立花鑑寛・加納久納とともに「華族学校設立大意」を建議して以降、華族学校の設立に尽力する。一月二四日には副幹事となって学制調査を担当、三月九日には幹事になり、同月一日には学務局長を兼任する。さらに三月末から、副館長の池田慶徳が館員と軋轢を生じて引き籠ると、約一ヶ月間その代理をつとめた。六月一三日には校長心得に任じられ、一月二九日には校長に補された。明治一〇年一〇月一七日、「華族学校」の開業式で、天皇によって校名が「学習院」と改まり、初代院長となる。

以後七年にわたって学習院長を務め、明治一七年（一八八四）四月に学習院が宮内省所管の官立学校となると、五月二四日に退いた。だが、学期の終わる七月末日に、宮内省が人員整理のため一度全教職員を解職とするまでは、宮内省御用掛准五等官学習院掛りとして同様の地位にあった。この間、明治一四年一二月には、多年職務勉勵の慰勞「毎年半季金百円」が贈与されており、明治一五年一二月二七日には「学習院創立以来事務勉勵ニ付特旨ヲ以テ位一級被進」し、正五位を授けられている。

学習院長退任後は、宮内省に奉職した。明治一七年（一八八四）五月には宮内省御用掛、同年一〇月には華族局御用掛、同一九年には華族局主事補、同二一年五月には爵位局主事補、明治二二年七月には同局主事となり、明治二六年三月に依願退官した。一貫して華族局および爵位局（明治二一年五月二八日に華族局を改称）に在職しており、院長退任後も学習院の監督機関に身を置いたことになる。

その間、明治一七年（一八八四）七月、華族令制定により子爵となる。

明治二三年七月、貴族院創設に際して子爵選出議員となり、子爵会の中心的存在として死去まで在任した。

明治三八年一月三〇日、七〇歳で死去した。亡くなる前日に宮内大臣から叙勲の申牒があり、死の当日に従二位勲四等に叙された。

#### 4. 史料の内容紹介

本解題に続けて掲載する目録では、封筒等で一括されていた六つのましまりにごとく大項目を設けているが、ここでは立花の経歴に沿って、編年順に主な史料を紹介していきたい。なお、学習院の開業に至る経緯や開業式などについては、本誌掲載の拙著別稿「神田・虎ノ門時代の学習院」でも、本史料群を用いて検討しているので、併せて参照されたい。

以下、「」内の数字は本史料群の史料番号であり、史料引用にあたっては適宜、旧漢字等を常用の字に改め、句読点を補った。事実関係については、断りのない限り『学習院百年史』第一編（学習院、一九八一年）に拠った。

#### 4-1. 華族会館での学習院の開業準備（明治九〜一〇年）

華族学校設立の気運は、明治九年（一八七六）一月五日の華族会館新年会に端を発し、一二日には同館副館長・池田慶徳から学制に関する意見を徴する布達があった。

「学校目的大意」[1-1]は、これに応えたものと思われる。全一二条から成り、第二条で学校名を「研精学校」として、第三条で「此ノ学校ハ法律専門ノ大学校タルヘシ、是レ華族ノ義務ニ於テ最法律学ヲ急トスレハナリ」と述べる点によく特徴が表れている。校名を「研精学校」としているのは、明治八年（一八七五）一〇月七日に明治天皇が初めて華族会館へ臨幸した際の勅諭に「汝輩華族一般嗣後此館ニ従事シ協同勉勵学術ヲ研精シ」とあることに拠っており、新年会で学校建設の発議があった背景に、この勅諭が直接的な契機として存在していることを物語る。朱書で「鍋島」

と端書があるが、これは当時、立花と同じく華族会館幹事として華族学校の設立準備に従事していた鍋島直彬(旧肥前鹿島藩主)を指すと思われる。しかし、この史料の作成者が鍋島かどうかは決め手に欠く。

その後、一月一九日に立花鑑寛・立花種恭・加納久納の三名が提出した建議「華族学校設立大意」が学校設立へ向けた基本方針となる。だが、五月二十九日に華族会館内で行われた学校設立に関する会議では、「普通小学校ヲ設タルト、法律専門学ヲ設クルノ議ニ至ツテ、衆設岐シテ合セス。然レトモ其多数ニ依リ、遂ニ普通小学校ヲ設クルニ決ス。」という議論があった。先の「学校目的大意」に「研精学校」案と通底する「法律専門ノ大学校」という方針が、もう一つの重要な選択肢として存在したのである。

こうして学校設立が決定すると、六月一三日には立花が校長心得に任命され、同月一五日には学校事務所が設けられた。この前後、立花は華族会館に書籍を寄贈しており、副館長からの感謝状がある「4-2」。これら華族会館の蔵書の多くは、後に学習院へ引き継がれることになる。

九月一二日には、宮内省から校地七九〇坪を受領した。しかし翌年の開業に当って改めて天皇から下賜された校地面積は一〇〇三九坪であった。この隔たりを物語る史料と思われるのが、七月から一〇月にかけて文部・内務両省の間で交わされた書類の写しである「1-12」。学習院の校地を含む神田錦町三丁目一番地は、明治に入って陸軍省用地となっていた。この史料は、これに隣接する開成学校の校舎増設に当たっての交渉記録であり、かつ華族会館の罫紙を使用した綴である。これらの点から、この土地が学習院の校地に追加された可能性があるが、断定はできない。この開成学校の土地について、翌年二月二三日付の岩倉具視書翰「6-4」に、「開成学校地処之儀、田中〔不二磨・文部大輔〕へ掛合候處、多分六ヶ敷返答ニ候得とも、尚一応勸考返事」とあり、関連する史料と思われる。

一〇月五日には、華族以外の子弟入学について、立花が華族会館長の岩倉に意見書を提出している「1-6」。立花は、学校は「敢テ大規模アルベキニ非ズ」という立場から、「同族〔華族〕率先シテ授業ヲナシ、教場閑ヲ得ルアラハ士庶ヲシテ之ヲ加ヘ候ノミ」と、士族・庶民から生徒を採

ることは消極的な見解を述べている。これに対して、年月日久ながら、岩倉は「士民亦或ハ入学ヲ許サントス、是レ即チ公利ヲ以テ私益ヲ拡ムル所以ナリ」とし、士族・庶民からも生徒を採ることを容認していた「1-17」。岩倉は、翌年九月二七日の開業式に先立つ演説でも、漸次士民子弟を入学させるべきと述べており、この方針が実現していく。

明治一〇年(一八七七)に入ってから、一月六日の華族会館開館式(新年会)で立花校長は祝辞を述べ、天皇より賜金があったこと、神田錦町で校舎の建築が進んでいることなどを報告した「1-21」。

その後、六月一日には仮に授業が開始される。この時に立花が読んだ祝辞は、内閣文庫所蔵の岩倉具視関係文書に輯録されているが、その草稿がある「4-6」。

この間、徐々に教師の採用も開始された。三月には、採用された教師たち<sup>16</sup>が、漢学の力を試験しようとする華族会館長代理・大原重実<sup>17</sup>に対して、師範としてあるべき学を修めている事の自負から、その不当さを校長・執事に訴えている「1-18」。しかし、その大原は九月六日に死去し、小石川伝通院で行われた葬儀には、立花種恭が華族総代として会葬した。その際の弔辞が残っている「1-8」。

#### 4-2. 学習院の開業式(明治一〇年九月一〇月)

明治一〇年(一八七七)一〇月一七日の開業式に関する史料は、本史料群の中核を占める。

まず、九月六日付の添書のある「華族学校開業式ニ付臨幸御次第」<sup>18</sup>「1-10③」を含めた綴がある「1-10」。これによって、開業式への天皇行幸に向けた宮内省側との折衝が、九月初頭から本格化したことが判明する。

この綴には、「臨幸御次第」の別紙として「第一号図式」・「第二号図式」<sup>19</sup>「1-10④・⑤」があるが、これら三点は最終的に当日の式次第となっていく。式次第の作成途中の史料があり「2-2」、端書から九月二六日段階のものだと判明する。もちろん、式次第の完成版もある「2-1」。これ

を活字印刷したものが尾張徳川家史料の中に存在し、当日参加する華族たちに事前配布されたことが分かっている<sup>(20)</sup>。

次に、祝詞草稿「4-3①」には、端書「九月廿三日夜調」があり、九月下旬から祝辞等の用意も行われたことが分かる<sup>(21)</sup>。

また天皇・皇后の親臨については、一〇月四日付の「本月中旬ヲ以テ開業ノ式ヲ挙行」する旨の宮内省への上申と、それに対して親臨を明言し返答した文書の控えがある「2-3」。

この九〜一〇月の開業式準備の過程を、立花は日誌に記録している「5-4」。この日誌は、罫紙の欄外上段に日付と会同者名などが記され、一つ書で内容が記されている。その日付は九月二日から始まって一〇月末日まで確認でき、開業式に至る経緯が詳細に分かる。よって、以下で他の史料を説明する中でも、適宜内容に触れていきたい。

一〇月一七日の開業式当日は、午前中に天皇・皇后の親臨する開業式が行われた。ここで、天皇・皇后によって下賜された勅語・令旨「3-8-1, 2」と、翌一八日の皇太后の行啓で下賜された令旨「3-8-3」がある。いずれも、学習院大学図書館にも同じ史料が所蔵されている<sup>(22)</sup>。書体・様式から図書館所蔵の方が正式なもので、本史料群のものは校長が所持していた控えと思われる。なお、これらの草稿と思われる史料もある「3-8-4」。先の日誌「5-4」の九月二九日条には「勅語内拝見ニ而御答辞調之事」とあり、事前に勅語等の内容を知らされていたこと、またその上で答辞が作成されたことがわかる。

この午前中の親臨開業式でのものと思われる小学男子生徒総代の祝詞「2-6」には、「不用」との端書がある。だが、当日に男子生徒総代・秋元興朝の祝詞が省略されたか確証はない。

親臨開業式の後、天皇・皇后は教場を巡覧した。この時の各教場の生徒人数や教師、学科等について記したと思われる史料がある「2-9」。この史料に年代の記載は無いが、親臨開業式関連を一括した封筒（目録の大項目(2)）に収められていること、表題に「華族学校」とあること、生徒数が計一七〇人程度しかないこと、教師が開業式当時の人員と一致するこ

と、などの点から、教場巡覧の際のものと判断した。

天皇・皇后が還幸啓した後、午後には多数の在京華族を集めて、改めて開業式が行われ、夕方からは祝宴が催された。これらの祝賀行事では、多数の祝辞が読まれたが、本史料群には次のものを確認できる。午後の開業式における岩倉華族会館長の祝辞に対する校長答辞「1-14①」、夕方の祝宴における東京府知事・楠本正隆の祝辞「1-2」、同じく宴席における立花の祝詞「2-5」である。また、いずれの場でのものかは確定しがない立花の祝詞もある「2-7」。なお開業に際しては、華族同志および局館職員から金銭の寄贈があった「1-15」。

その後、翌一八日には皇太后の行啓があり、一九日には院内の一般公開と政府高官を招いた祝宴があり、二〇日にも職員・教師の祝宴があった。このうち、立花による一八日の皇太后令旨に対する答詞が「4-1」、一九日の祝辞が「1-14②」、二〇日の祝辞が「1-14③」である。

続いて、二五日には京都学習院以来の勅額の下賜が、二六日には改めて校地の下賜があった。

このうち、勅額下賜の経緯については、立花の日誌「5-4」に次のような記述がある。九月二日条に「勅額之義ハ 叡慮之旨有之義再出来ニ不及事」、一〇月二五日条に「学習院額宮内省々賜 但戸田忠行ヲ名代ニ出ス」、翌二六日条に「御礼参内ス」・「勅額玄関之事 是ハ鎮チウ網ミ之事」、同月三一日条に「勅額早々掲上之事」。ここから、第一に京都清水四番御文庫に保管<sup>(23)</sup>されていた勅額を、わざわざ東京へ送って下賜したことが天皇の意向によるものであったこと、第二に実際に額が下賜されたのが一〇月二五日であったこと、第三に玄関への掲上は一〇月末の時点では未だなされていなかったこと（それは「鎮チウ網ミ」の準備に時間を要した可能性があること）、が判明する。

この第二の点について『学習院百年史』第一編（九五〜九六頁）では、勅額下賜の日を一〇月二五日と二六日とする二様の史料があるとした上で、二六日説を有力と見ている。だが、これが日誌という同時代性が高い史料であることを鑑みれば、戸田忠行を名代に出して勅額を受け取った

二五日が正しいといえよう。<sup>(25)</sup>校地を下賜する旨の文書を受領した日と、立花が御礼に参内したのが二六日だったので、『華族会館誌』では二六日条に受領したと記しているが、この叙述が混乱の原因となったのではないか。なお、この時に戸田が名代に立ったのは、連日深夜に及んだ開業式の準備を経て、開業式後の二〇日頃からこの頃まで、立花が病気に罹っていたためだということも、この日誌から判明する。

最後に、一〇月三〇日には職員・教師の慰労調がなされており、一時給金があったようである〔1—13〕。

#### 4—3. 学習院長時代（明治一〇—一七年）

立花の学習院長時代の史料は点数が多いため、適宜小見出しを付けて述べていく。

##### ①「学習院備忘」

立花院長の校務関係史料として最初に挙げるべきは、開業後二年分の校務日誌「学習院備忘」（明治二年〔5—1〕、明治二年〔5—2〕）であろう。神田校地時代の校務に関わる日誌史料としては、明治一六年（一八八三）以降は「教務課日誌」（学習院アーカイブズ所蔵）などが残っているが、それ以前のもの恐らく明治一九年の大火のために残存しておらず、貴重である。これは推測の域を出ないが、明治一三—一七年の同名史料も残存していないことから、この二冊に関しては立花家で保管していたために難を逃れたのだろう。

その内容は、基本的に立花院長の動静を記しており、当時立花が、ほぼ毎日学習院へ出勤していたことが窺える。また時々の覚書的な性格もあり、年頭の授業始めでの演説草稿や、書翰・書類の抜書ないし草稿も散見される。

##### ②外国人教師フルベッキの雇用と解職

この「学習院備忘」の明治一年（一八七八）七月一七日条には、午後一時から上野精養軒でフルベッキ夫婦を招いて午餐会を行ったことが記されている。フルベッキは、前年一月二〇日に学習院に学事顧問として招聘されたが、この年の七月一日に「満期雇止め」となり、米国へ一時帰国することになっていた。つまりこの午餐会は、解職になるに当たつての饗食であった。同日条には楢円のテールを囲んだ図に人名が記されており、フルベッキ夫妻のほか、三條実美太政大臣、岩倉具視右大臣、東久世通禧元老院議員、そして学習院から立花院長のほか、大野徳孝三等教師兼二等主事、大石道直二等教師（通弁ノ為）が参加者だったことが分かる。

この二日後の七月一九日条には、フルベッキが、自身の所持していたピアノを学習院へ安価で譲渡したことが記されている。これに関して、別頁に挟み込まれていた覚書紙片には、「ピアノ之事」として、「チックリング作上品。原価六百元運賃共之所、紙幣四百円ニ而宜シ。米国へ持越ニ而モ損ナシ。白川宮（北川宮）の好ナレトモ名品ニモアリ院江出シ度由」と記される。

ところで、フルベッキの雇用に際しては、元老院幹事で副議長仮任の職にあった陸奥宗光を介した折衝があったようで、五月二十九日付の書翰がある〔6—7〕。この陸奥書翰は岩倉具視宛てであるが、同日付の立花宛て岩倉書翰〔6—5〕の別紙として、立花の手に渡っている。その内容をみると、まず冒頭に「亡父死去之義二付、懇々御尋問被成下、難有奉拜謝候」とあり、陸奥の父・伊達千広が亡くなったのは明治一〇年（一八七七）五月一八日であるから、年代を確定できる。さらに内容をみると、「曾テ御内談仕置候フルベッキ氏一条二付、御繁用中尊慮ニ被懸縷々被仰附之件二付、立花氏之一書共夫々承知仕候。小官之考ニテハ、同人義ハ温厚之君子ニ而、永ク我国ニ住居スルヲ希フ之志有之候人故、給料多少等ハ強テ異存有之間敷存候。」とある。当時フルベッキは元老院雇の職にあり、この書翰を送る直前に、陸奥は岩倉へ、フルベッキへの賞与金についての回答を催促する文書を送達している。<sup>(26)</sup>前半の「曾テ御内談仕置候フルベッキ氏一

「条」とは、このことを指すのだろう。そして、後半では、「立花氏之一書」を受けて、学習院への雇用に向けて助言を行っていることが分かる。

さて、フルベッキは米国へ帰国後、一月一二日にサンフランシスコから立花へ書翰を送っている「1—5」。ここには、八月二四日にアメリカに着き、今冬はカルフォルニアで過ごし、来春はニューヨークで日本事情の演説会を開催し、来夏にはヨーロッパで数ヶ月を過ごし、来秋に身体壮健となれば再び日本に帰りたい、と書かれている。この後、実際に明治一二年（一八七九）に再来日しているが、学習院に復職することは無かつたようである。

### ③校務に関わる史料

再び立花院長の動静に戻る。設立準備から宮内省所轄の官立学校になるまで、長らく校長・院長を務めた立花であるが、明治一一年（一八七八）二月には、院長を退くことを示唆する意見書を認めていた「1—24」。これは、華族会館副館長・壬生基脩に宛てられており、三月一〇日に提出した旨の朱書端書がある。この意見書を出した背景には「頃日新聞紙上ニ中学生ノ不履行不端正ヲ掲載シ世上ニ喋々ス」という状況<sup>20</sup>があったようである。これによって「五百ノ貴族ヲシテ其名ヲ同辱シ同一汚穢ニ随ラシメ不良不正ノ標準トナリ聖論ヲ冒瀆シ 皇国ヲ汚辱スル者亦無トス可ラス」という事態を招くことを、立花は危惧していた。そして、師範学校には箕作秋坪や小畑篤次郎、女子師範学校には中村正直、東京大学には加藤弘之がおり「其人ヲ得テ」いるが、学習院も「又一步ヲ進メ花実ヲ求メントスルニ際」して、「一ノ英傑ヲ依頼シテ院長ト定メ〔中略〕以テ進マハ何ソ諸校ニ卓越タラサル」との憂いがあり、立花は院長退任を考えた。そして、自身については「希クハ副タルノ命アラハ拮据聞勉事ニ爰ニ従ン」という見解であった。要するに立花は、自身は院長を退いて次長のような任に就き、「一ノ英傑」が後任となるべき事を主張したのである。だが、結果としてこの願いは聞き届けられなかったようだ。

次に、学習院長に提出された学生側からの意見書「蕪言」が興味深い「1

—19」。これは、明治一三年（一八八〇）八月に佐竹義理・烏丸千佳二（のち南部光臣）・小笠原長育の三名が認めたものである。この意見書が主張するのは、国家が輸入多寡により財政難となる中で、「院中需用ノ器具物品成ルベク西洋物ヲ廢シ皇国品ヲ用ユベキナリ」ということである。これが書かれた当時、烏丸は男子実学生徒、佐竹と小笠原は文学科漢学生徒であった。もともと、佐竹と小笠原はすでに二〇歳を越えており、それぞれ旧久保田新田藩主家と旧勝山藩主家の当主となっていた。当時の学則には演説会の規程があり、職員・生徒などの中から演説者が選ばれていたから、そうした場での提言なのかもしれない。

### ④院長時代の書翰

ここで、目録の大分類(6)にある、院長時代の書翰について見ておきたい。まず、岩倉具視書翰が七通と多数を占めるが、囲碁会や懇親会への招待「6—3, 10, 11」、卒業証書授与式への欠席連絡「6—2」など、短文のものも多い。

そこで、岩倉書翰の中では比較的長文の次の書翰をみてみたい「6—14」。前略。今般新造軍艦出来、今日天覽相済候ニ付、明十一日ヨリ勅奏官及華族一同拜見ニ差許切手相渡り、之ヲ以東海鎮守府へ持参候ハ、同所ヨリ軍艦へ之通船用道敷到候筈ニ有之候。就テハ学習院役員モ、右之振合ヲ以三日之間拜観之券海軍省へ公然及依頼置候間、其旨学校役員中へ御達可有之、人員等部長局ヨリ院ニ通知御承知ト存候。(後略) 明治一一年（一八七八）七月一〇日、イギリスで建造した軍艦、扶桑・金剛・比叡の三艦が横浜に到着して天皇の観覧に供されており、翌一日から三日間勅奏任官と華族に縦覧が許されていた<sup>21</sup>。この書翰は、これに加えて学習院職員も軍艦を拝観できるように便宜をはかった事を伝達したものである。これに関して、「学習院備忘」「5—1」の七月二三日条には、「学習院職員教師拜見ノ義も被差許ニ而、東海鎮守府証札持参相越、右之都合ニ付今日受業休暇之段昨日達」とあり、実際この日に観覧へ行つた者が居たことを物語る。



次に、子弟の入学についての便宜等を依頼する内容の書翰も多い。しかし学生名簿と対照すると、大木喬任の息子遠吉「6-6」、山口県士族の谷春雄・宍戸鬼熊「6-9」、陸奥宗光の息子廣吉・潤吉「6-13」、彼らは何れも名簿に記載がなく、学習院への入学はかなわなかったようである。西園寺公望が京都の平民志願者の手続き方法について尋ねた書翰もある「6-16」。

宮内卿・徳大寺実則からは、陸軍学校に入校した皇族への「御賞品」授与についての書翰が二通ある。日付の早い二月二〇日付の書翰「6-15」には、「両宮御義二付〔中略〕御賞品之義御取斗振御細示何も拝承候。是迄陸海軍学校ニ於而直接賞品差上之例規有之候ハ、御院ニ於而御取斗之方今後之都合も宜敷存候間、今一応三好慎蔵西尾両士へ御訊問ニ相成候而者如何哉。」とある。まず「両宮」が誰を指すかが問題になるが、三吉慎蔵は北白川宮家令、西尾為忠は閑院宮と伏見宮の家令であり、閑院宮載仁親王が明治一〇年（一八七七）一〇月に陸軍幼年学校へ入学、北白川能久親王が翌年二月に陸軍戸山学校に入学しているので、この両者を指すことが判明する（ゆえに書翰の年代も明治一一年と確定できる）。次に、翌日の書翰「6-1」では、閑院宮が入学した陸軍幼年学校に問い合わせたところ、「一般生徒同様ニ賞与品御受ニ相成候旨確ト」回答があったこと等が記されている。この後、学習院では学期末に学業優等の生徒へ賞品が与えられることになるが、その方法や前例について確認したものであろうか。

#### ⑤ 院長時代の祝辞・演説文

最後に、目録の大分類(3)と(4)に集中している、院長時代の祝辞・演説文などについて整理しておきたい。この大分類について、(4)には草稿が多く含まれるのに対して、(3)のものは清書されている点に特徴がある。また、目録には修正の痕などが見られることから、多くの資料に「草稿」と表題を付しているが、立花はそれをそのまま朗読していた可能性も高い。

最も早いものとして、明治一〇年（一八七七）末の第十五銀行（華族銀行）開業式での祝詞「4-3②」があるが、それ以外は大きく学習院関係

と華族会館関係とに大別できる。

学習院関係のものでは、開業式の周年記念祝宴での祝辞が多数ある。この祝宴は、一周年の明治一一年（一八七八）には一〇月一七日に行われたが「3-1, 2」、明治二二年からは神嘗祭の日と重なったため、翌一八日に変更された（明治一三年〓三周年「4-5, 20⑧」、明治一五年〓五周年「4-20⑤」）。また、明治一四年は一〇月三日に桂宮淑子内親王が亡くなった影響で、二月一七日に延期されている「4-20⑥・⑦・⑩」。なお、この明治一四年の記念式には、のちに華族女学校長も務める西村茂樹が演説をしている<sup>(35)</sup>「2-4」「5-3」。

これに次いで、校務に関わって、折々に読まれた祝辞や演説文がある。各年に共通するものとして、年頭の授業始めでの演説「4-19, 20②・⑨・⑫」、卒業・修業式での祝辞「4-3⑧, 16, 18, 20⑬・⑮・⑰」、長期休暇前後での演説「4-7, 13, 20①」がある。このうち、明治一一年と一二年については、「学習院備忘」<sup>(36)</sup>「5-1, 2」の中にも演説草稿が見られる。そのほか、明治一一年九月の寄宿舎開設時のもの「4-4, 20③」、明治一六年一月の書器室落成時のもの「4-20⑯」がある。これら以外に「四ツ谷御苑学校」の証書授与式における演説文もある「4-20⑩・⑭」。だが、この「四ツ谷御苑学校」がどういった学校であるかは判然としない。

華族会館関係のものでは、特に新年会での祝詞が多数ある。明治一〇年（一八七七）「1-21」以降、明治二一〜一七年の各年のものがあり、草稿と成稿がそれぞれ残されているものも多い「3-3〜7」「4-3③・⑤」⑦・⑨、9〜12」。これに次いで、明治八年一〇月七日に明治天皇が華族会館に行幸したことを祝う周年祝賀のものがある「4-3④, 20④」。その他、紅葉館における同族親睦会での祝辞「4-15」も、華族会館関係と思われるが年代は特定できなかった。

#### 4-4. 学習院長退任後（明治一七〜二八年）

本史料群には、点数は多くないものの、立花が学習院長を退いた後の、宮内省華族局（爵位局）時代の史料も含まれるので、以下に年代順に六つ列記して紹介する。

第一に、これは正確には院長退任前だが、明治一七年（一八八四）五月六日付の伊藤博文書翰がある〔6-17〕。この書翰は「学習院之現情及御意見」について「拝承仕度」との内容である。伊藤は、この直前の三月二一日に宮内卿に就任しており、四月には学習院が宮内省管轄の官立学校となることが決まっていた。これに当たって、運営方法などについて助言を求めたものと思われる。

第二に、「愛国心をして益々発達せしむる方法 東京府教育会の調査立案」〔1-25〕は、二五項目にわたって「普通教育ニ基きて愛国心を発達せしむる方法」を記している。東京府教育会の調査書の写しと思われるが、同会は明治二二年（一八八八）六月に発会しているので、それ以後の文書である。

第三に、学習院と華族女学校の生徒数を記した文書がある〔1-22〕。これには「東宮殿下」との記載があり、明宮嘉仁親王を指すと考えると、その在学期間（明治二〇〜二七年）のものとして推定される。

第四に、恐らく宮内省が、学習院の内状を調査して作成した報告書がある〔1-11〕。末尾に明治二六年（一八九三）三月一六日の日付があり、二つの問答から成っている。前半部分は「学習院学生管理取締上又ハ教員ノ感情行為ニ付同院某教授某学生監助手ニ問答」したもので、教員の欠勤や怠惰な態度の実態と、教員の中での院長・次長・幹事への不平の所在についての質問に答えている。後半部分は、別科生徒の五辻治伸と一川清への問答で、学則の在り方や学生の不満・教師の欠勤状況などについて答えている。特に、歴代院長を振り返って、立花院長は幼少で論じ得ない、谷院長は「無為ニシテ治マル」とした上で、「大島院長ノ時代ハ統理宜ヲ得ス学生一般不満ニ堪ヘズ最暗黒ノ時代ト思惟セリ。三浦院長ニ至テ積弊ヲ

洗滌シ勅裁ヲ仰テ完全ノ学制ヲ定メ」たと語っているのは、初期の院長の更迭背景を知り得て興味深い。このように、どちらの問答もかなり赤裸々に学内の状況を吐露している。これらの史料からは、宮内省でも立花が、学習院関係の職務に従事していたことが窺われよう。

第五に、明治二七年（一八九四）六月二〇日に発生した明治東京地震によって、学習院の四谷校舎が破損を蒙ったことに関わる史料が二点ある。一つが地震直後の校舎新築願いの写文〔1-4〕であり、もう一つが、翌明治二八年一月に近衛篤磨学習院長が宮内大臣へ提出した、小田原へ校舎を新築すべきとの意見書である〔1-23〕。

第六に、明治二八年（一八九五）の日清戦争当時に、華族一同が将校下士卒等へ送った一連の覚書等の写しがある〔2-8〕。この明治二八年の史料二点が、本史料群で最も年代が新しいものとなる。

#### 註

(1) この紙焼き資料の撮影順番と、本目録作成時における取上順番（これに従って史料番号を附した）には相違があり、秩序がどの程度保持されて来たかは怪しい部分がある。とはいえ、後述するように、この異同は封筒等で一括されていた六つのまとまりの中でのことと推察される。

(2) 会期…二〇一七年一〇月二日（月）〜一二月九日（土）。

(3) 立花種忠「父を語る」（『学習院物語』第二篇 回想録（二）上、学習院アーカイブズ所蔵）。

「学習院物語」は、山梨勝之進院長の時代に、一九四〇年の紀元二六〇〇年を記念する事業として企画された。その「例言」には、「本書は明治十年本院開院より開校五十年の昭和二年に至るまでの時代を主とし旧職員卒業生等本院関係者の回想談を収録したもので〔中略〕曩に刊行した学習院史と表裏の関係に立ち彼を正篇とすれば此は外篇とも見るべきものである。」とあり、開校五〇年を記念して

- 刊行された『学習院史』（学習院、一九二八年）の「外篇」と位置付けられた。同じく「例言」では、「昭和十五年新秋に着手し昭和十七年歳晩に成稿した」というが、戦時の物資不足が進んだ影響を受けてか、出版には至らなかった。学習院アーカイブズには、その稿本が所蔵されている。
- (4) 内山一幸『近代における旧藩主家文書の基礎的研究「旧柳河藩主立花家文書」の検討を中心に』（九州大学大学院比較社会文化研究院歴史資料情報講座、二〇〇四年）。同『明治期の旧藩主家と社会』（吉川弘文館、二〇一五年）。
- (5) 福岡県立美術館・御花史料館編『柳川立花家の至宝』（福岡県立美術館、二〇〇九年）、『図説立花家記（柳川市史別編）』（柳川市、二〇一〇年）、など。
- (6) 以下の史料・文献を参照した。「正三位子爵立花種恭叙勲ノ件」一九〇五年一月三日（国立公文書館所蔵「叙勲裁可書・明治三十八年・叙勲卷二」勲一五三）。「立花子爵の薨去、其葬儀」（『学習院輔仁会雑誌』六五号、一九〇五年三月）。衆議院・参議院編『議院制度七十年史 貴族院・参議院議員名鑑』（大蔵省印刷局、一九六〇年）。霞会館華族資料調査委員会編『華族会館誌』上・下巻（霞会館、一九八六年）。『朝日日本歴史人物事典』（朝日新聞社、一九九四年）。
- (7) 『旧幕府』四卷八号（一九〇〇年八月）には、幕末期の肖像写真（口絵）と詳細な経歴（三〇〜三二頁）のほか、同年六月一七日に上野三宜亭で行われた、戊辰戦争などの旧懐談（『史談会記事』三八〜四二頁）が掲載されている。
- (8) 『華族会館誌』卷一〇／一一九頁。以下同様に、『華族会館誌』の出版表記については、前掲・霞会館華族資料調査委員会編『華族会館誌』上・下巻を典拠とし、原史料の巻数と同書で振られた頁数を記すこととする。
- (9) 「従五位立花種恭昇叙ノ件」一八八二年八月（国立公文書館所蔵「公文録・明治十五年・第二百十五卷」公三四二三）。
- (10) 前掲「正三位子爵立花種恭叙勲ノ件」。
- (11) 『華族会館誌』卷三／五頁。
- (12) 『華族会館誌』卷四／五六頁。
- (13) 『華族会館誌』卷五／一一一頁。
- (14) 『華族会館誌』附録三 学習院／三八〜九頁に翻刻がある。
- (15) 国立公文書館内閣文庫所蔵「岩倉具視関係文書」（二六五―二八六）第六五冊「華族ニ係ル書類一」。
- なお、同日の華族部長局の各部長による祝辞が、三池カルタ・歴史資料館所蔵「三池立花文書」に存在する（『華族学校教場開設式祝辞』一八七七年六月一日、「三池立花文書」一〇七七）。本史料の閲覧にあたっては、同館長の梶原伸介氏に御高配を賜った。記して御礼申し上げる。
- (16) 作成者として朱印のある教師について、フルネームを補って以下に掲げる。大野徳孝、工藤一記、藤塚唯一、佐野安、並河尚鑑、小倉庫二、若林龍吉、生駒恭人、城谷謙、財満久純、林正幹。彼らの多くは東京師範学校の卒業生であった。
- (17) 当時は岩倉具視が華族会館長であったが、多忙のため学校事務は館長代理の大原に委任していた（『華族会館誌』附録三 学習院／四〇〜四二頁）。
- (18) 『華族会館誌』卷五／一〇三〜五頁に、朱書を反映した翻刻がある。
- (19) 「御族中回章簿」第四冊（徳川林政史研究所所蔵「尾張徳川家文書」尾四―一三）。
- (20) 『華族会館誌』附録三 学習院／一〇七〜一二四頁にも、式次第全文が掲載されている。
- (21) この史料中には「同族ノ交際同心ニナリ今又開校ノ挙ニ至テ 皇上皇太后爰ニ親臨アリ特ニ「数字分空白」ノ校名ヲ賜フ」、また「種恭不肖ノ身トシテ之ヲ校長ニ受ケ此盛会ノ佳辰ニ逢遭ス」とある。「同族ノ交際」によって開校し、天皇が親臨して校名を下賜し、立

花が校長であるというから、学習院の開業式へ向け用意された初期段階の草稿だと推定した。

- (22) 学習院大学図書館所蔵「勅諭令旨等」一―三。
- (23) この史料に出てくる教師は、広瀬範治、大石道直、工藤一記、若林龍吉、林正幹、生駒恭人、棚橋絢、城谷謙、佐野安であるが、いずれも開業式当時に在職している。
- (24) 前掲『学習院史』五四頁。
- (25) 宮内庁編『明治天皇紀 第四』（吉川弘文館、一九七〇年）も、勅額の下賜は二五日としている（二八九頁）。
- (26) 『華族会館誌』巻五／一二二―一二三頁、附録三「学習院」一四四頁。『華族会館誌』も日誌型の史料だが、編纂物である点に注意が必要である（編纂経緯は、前掲『華族会館誌』下巻所収の解説を参照）。
- (27) 「陸奥元老院幹事忌服届」一八七七年五月一九日（国立公文書館所蔵『公文録・明治十年・第百三十七巻』公二一五九）。
- (28) 「米人フェルベッキ氏賞与金ノ儀ニ付追伺」一八七七年五月一七日（国立公文書館所蔵「諸雑公文書（狹義）」雑三〇七）。
- (29) こうした新聞報道の例として、少し時期は下るが、一八七八年七月一四日付の『読売新聞』に、某華族が遊びが過ぎて学習院を退校になつたとの記事がある。
- (30) この当時、明治初年から続く輸入超過に加えて、西南戦争の戦費調達のために紙幣増発により、激しいインフレが起こっていた。
- (31) 『学習院年報 第三』（二八八一年一〇月）。
- (32) 前掲『明治天皇紀 第四』四三四―四三五頁。
- (33) 前掲『学習院史』に所収される「卒業及び修学学生名簿」の「第一表 明治十八年八月以前入学者」を参照した（附表六四―八〇頁）。
- (34) 「学習院備忘」[5―2] 一八七九年一〇月一七日条には、「今日親臨開業式二週紀念之處、今年分神嘗祭二而差支二付、明十八日之事二本館へ過日伺済」とある。
- (35) 松平直亮編『西村茂樹先生論説集 第一巻』（修徳園蔵版、一八九四

年六月）に「学習院演説」として、全く同文ではないが翻刻がある（二九四―九頁）。

## 目録凡例

- 一、本目録は、立花種恭旧蔵史料の目録である。
- 一、データを採取した項目は、「表題」・「年月日」・「西暦」・「作成・差出宛名・受取」・「形態・記述法」・「数量」・「備考」・「史料番号」である。
- 一、「表題」・「年月日」・「作成・差出宛名・受取」について、目録採取者が補った情報は括弧内に記した。また推定に当たる場合は「カ」を附した。
- 一、「史料番号」の附与は、受け入れ時の現状からの取上げ順に従った。
- 一、目録の配列は、「史料番号」の順により、封筒等で一括されていた六つのまとまりごとに（1）から（6）の大項目を立てた。
- 一、形態が綴の史料については、史料番号に次いで丸番号を附して、内容情報を採取した。
- 一、本史料群の公開は、画像データ（デジタルカラー撮影）によって行う。閲覧・利用に当っては、まずは電話・メール等で当館へ問い合わせを願いたい。
- 一、旧字等は適宜常用の字に改めた。

立花種恭旧蔵史料目録

(O) 木箱

表題	年月日	西暦	作成・差出↓宛名・受取	形態・記述法	数量	備考	史料番号
(総黒漆塗木箱)				木箱	1点	460×308×10.5 (蓋込)・9.4 (蓋無)。北白川宮家所用紋あり。裏に朱書「高輪御殿」あり(立花種勝氏夫人となる美年子女王(北白川宮成久王第一女子)所用品と思われる)。	0

(1) 学習院書類 (明治九〜二八年、25点)

(封筒) 学習院書類			立花	袋・墨書	1点		10
学校目的大意 (華族学校「研精学校」設立案)	(明治九年カ)	一八七六		冊・墨書	1点	版心「華族会館」青色九行罫紙。朱書「鍋島」あり。	11
十月十七日夜 東京府知事楠本正隆祝辞	明治一〇年一〇月一七日	一八七七	東京府知事従五位楠本正隆	冊・墨書	1点	青色一〇行罫紙。	12
(学習院開業式次第書上)	(明治一〇年一〇月)	一八七七	↓宮内大臣子爵 土方久元	冊・墨書	1点	青色一〇行罫紙。朱書・付箋あり。	13
(客月廿日激震の被害により校舎新築願い写)	明治二七年七月	一八九四	学習院長子爵 田中光顕	冊・墨書	1点	版心「潮音書屋」青色一〇行罫紙。	14
(書簡(英文)、奉職中の厚情に御礼、来秋に立帰度)	一八七八年一月二日	一八七八	G. J. Verbeck (San Francisco) [ギドールベック] ↓Tachihana, Director of Gakushuin, Tokyo. (立花種恭)	状・ペン 墨書	1通	封筒共。虫損大。日本語訳文同封(版心「学習院」青色九行罫紙に墨書)。ベルベッキと記されているが、フルベッキのこと。	15
(意見書、士庶より華族を優先し、敢て大規模あるべきに非ず)	明治九年一〇月五日	一八七六	立花種恭	状(2枚)・墨書	1点	版心「華族会館」青色九行罫紙。	16
(意見書、学習院の教育改正につき)	明治一三年二月	一八八〇	北大路光典	状(4枚)・墨書	1点	青色一〇行「萬花」製罫紙。前欠。汚損あり。	17
(改正四位大原君の葬儀に会し弔辞)	(明治一〇年九月九日)	一八七七	↓学習院々々長立花種恭殿	状・墨書	1点	青色九行罫紙。	18
(草稿、右大臣殿江添書、諸葛江左之通)	(明治一〇年カ) 三月四・五日	一八七七	(立花種恭カ)	状・墨書	1点	諸葛信澄は明治九年六月に華族学校の学監心得、同年一月に学監となり、翌年五月まで務めた。	19
(学校開業式書類綴)	(明治一〇年九〜一〇月)	一八七七		綴	1綴		110
① (開業式書類御回の添書)	(明治一〇年カ) 九月一〇日	一八七七	五辻安仲 ↓立花校長殿	墨書	(1枚)	朱書「臨幸調第四号」端書あり。	110①
② (臨幸御次第別紙の添書)	(明治一〇年九月六日)	一八七七	五辻安仲	墨書	(1枚)	朱書「五辻氏分九月十日呈越之調等」「本書八同十七日岩倉館長方三而五辻氏江差返ス」端書あり。	110②
③ 華族学校開業式二付臨幸御次第	(明治一〇年九月カ)	一八七七		墨書	(4枚)	朱書や付箋多数あり。	110③
④ 第一号図式(奉迎奉送の整列図)				墨書	(1枚)		110④
⑤ 第二号図式(正堂内の席次図)				墨書	(1枚)		110⑤
⑥ (諸注意事項書上)				墨書	(1枚)		110⑥
学習院学生管理取締上又ハ教員ノ感情行為ニ付同院某教授某学生監助手ニ問答セシ概略	明治二六年三月一六日	一八九三		冊・墨書	1点	版心「宮内省」褐色一三行「金田」製罫紙。	111

表題	年月日	西暦	作成・差出・宛名・受取	形態・記述法	数量	備考	史料 番号
(神田錦町の土地所管につき往復書類写綴)	明治九年七月一〇月	一八七六	—	綴	1綴		1-12
①(照会、東京開成学校教場増築にて北方に接する陸軍省用地の譲渡は差支なきや)	(明治) 九年七月一七日	一八七六	文部大輔田中不二磨代理 文部大丞九鬼隆一 ↓内務卿大久保利通	墨書	(1枚)		1-12①
②(回答、照会につき別紙の通り実地取調にて差支なし)	明治九年九月一五日	一八七六	内務卿大久保利通 ↓文部大輔田中不二磨代理 文部大丞九鬼隆一	墨書	(1枚)		1-12②
③文部省江引渡地内建家坪数並代価取調書	—	—	—	墨書	(1枚)	合坪七四八坪二合五夕、代価金三七四一円二五銭	1-12③
④(回報、兵器格納所の建家を陸軍省属望により地所のみ引渡となる)	明治九年九月二五日	一八七六	文部大輔田中不二磨代理 文部大丞九鬼隆一 ↓内務卿大久保利通	墨書	(2枚)		1-12④
⑤(回答、建物代価最前申進通にて買取された)	明治九年一〇月四日	一八七六	内務卿大久保利通 ↓文部大輔田中不二磨代理 文部大丞九鬼隆一	墨書	(1枚)		1-12⑤
学習院職員並教師慰勞調	(明治一〇年一〇月三〇日)	一八七七	—	冊・墨書	1点	青色九行罫紙。朱書「明治十年十月三十日條公方二而岩公其外柳原東久世壬生三氏ト共ニ協議済」端書あり。慰勞の一時給金額と役職・氏名を記す。給金の惣メ一九六円五五銭。	1-13
(開業式関係祝辞等級)	(明治一〇年一〇月一七、一八日)	一八七七	—	綴	1綴	青色一〇行罫紙。	1-14
①十七日夕 校長ヨリ館長へ答辞	(明治一〇年) 一〇月一七日	一八七七	(立花種恭)	墨書	(2枚)	表題は墨書端書より。	1-14①
②十九日夕 祝辞(草稿カ)	(明治一〇年) 一〇月一九日	一八七七	(立花種恭)	鉛筆	(1枚)	表題は墨書端書より。	1-14②
③十月廿日夕 院職員教師祝送之節祝辞	(明治一〇年) 一〇月二〇日	一八七七	(立花種恭)	墨書	(2枚)	表題は墨書端書より。	1-14③
(開業親臨につき同志より金銭寄贈書類綴)	(明治一〇年一〇月)	一八七七	—	綴	1綴	青色一〇行罫紙。	1-15
①(華族学校開業の親臨につき金五百円を寄贈)	明治一〇年一〇月	一八七七	橋本實梁ほか20名 ↓華族学校長 立花種恭殿	墨書	(2枚)		1-15①
②(学舎落成の親臨につき局館職員より金百円を寄贈)	明治一〇年一〇月	一八七七	植松雅平ほか20名 ↓華族学校長 立花種恭殿	墨書	(2枚)		1-15②
③(両大臣以下十九名への答稟・右大臣以下廿名への答稟)	—	—	—	墨書	(1枚)		1-15③
(学校設立の原由と将来の思想の概録)	(明治一〇年カ)	一八七七	—	冊・墨書	1点	青色一〇行罫紙。	1-16
(華族学校新設に関する岩倉具視演説文写)	(明治一〇年カ)	一八七七	—	冊・墨書	1点	版心「華族会館」青色九行罫紙。虫損あり。	1-17
(意見書、館長代理大原公の漢字力試験につき情実吐露)	明治一〇年三月	一八七七	教師(朱印多数あり) ↓校長・執事	冊・墨書	1点	版心「華族会館」青色九行罫紙。朱印の名前：大野、工藤、藤塚、佐野、並河、小倉、若林、生駒、城谷、財満、林。	1-18
燕言(院中需用の器具物品は西洋物を廃し皇国品を用うべし)	明治一三年八月	一八八〇	佐竹義理・鳥九千佳之二・小笠原長育 ↓学習院長 立花種恭殿	冊・墨書	1点	青色一〇行罫紙。	1-19
共立幼稚園創設ニ付該円月費ノ助成ヲ懇願スルノ書	明治一四年一月	一八八一	共立幼稚園社員 発起者惣代 渡邊東洋ほか3名 ↓正二位 浅野長勲公閣下	冊・墨書	1点	青色一三行罫紙。	1-20

表題	年月日	西暦	作成・差出↓宛名・受取	形態・記述法	数量	備考	史料番号
会館開館式之節祝辞	明治一〇年一月六日	一八七七	(立花種恭)	状・墨書	1点	青色一三行罫紙。	1-21
学習院生徒・華族女学校生徒	(明治一〇年代カ)	—	—	冊・墨書	1点	版心「宮内省」褐色一三行罫紙。生徒数書上(学習院は合計五九八人、華族女学校は総計三五八人)。	1-22
(意見書写し、校舎新築につき小田原の舊城山に本部を移転すべし)	明治二八年一月四日	一八九五	学習院長公爵近衛篤磨 ↓宮内大臣伯爵土方久元殿	冊・墨書	1点	青色一〇行罫紙。朱書「十一年三月十日壬生副長へ出ス」・墨書「未定稿」など端書あり。	1-24
(意見書、院長に英傑を依頼し、副たるの命を希う)	明治一二年二月	一八七八	立花種恭 ↓副館長 壬生基脩殿	冊・墨書	1点	青色一〇行罫紙。朱書「十一年三月十日壬生副長へ出ス」・墨書「未定稿」など端書あり。	1-24
愛国心をして益々発達せしむる方法 東京府教育会の調査立案	(明治一〇年代カ)	—	—	冊・墨書	1点	青色一三行「萬屋製」罫紙。東京府教育会は、明治一二年六月発会。	1-25止

(2) 華族学校親臨開業式書類 (明治一〇年一〇月・明治二八年、9点)

類 (封筒) 明治十年十月 華族学校親臨開業式書類	—	—	立花	袋・墨書	1点	—	20
華族学校開業親臨式(式次第)	(明治一〇年一〇月)	一八七七	立花	冊・墨書	1点	付属：①第一号図(親臨式奉迎の整列図)・②第二号図(親臨式正堂内の席次図カ)・③第三号図(開業式正堂内の席次図カ)	2-1
華族学校開業親臨式(式次第草稿)	明治一〇年九月二六日	一八七七	—	冊・墨書	1点	朱筆「十年九月廿六日調 第六号」端書あり。朱の訂正・抹消・欄外書込などあり。	2-2
(文書写、①学校開業につき本月中旬を以て開業式挙行の旨上申、②聖上皇后宮御親臨御沙汰)	明治一〇年一〇月四日	一八七七	①華族督部長 岩倉具視、②宮内省 ↓①宮内卿 徳大寺実則殿、②華族会館長従一位 岩倉具視	冊・鉛筆	1点	青色一〇行罫紙。墨書「十月五日夜本館の學校江達シ来り内々ニ而同夜校今来候写但不慎引ニ付」端書あり。	2-3
十一月十七日学習院演説	(明治一四年) 一二月一七日	一八八一	西村茂樹	冊・墨書	1点	版心「学習院」青色九行罫紙。53と同一。	2-4
十七日夜妻女携帯之席皇族大臣初御前ニ而祝詞	(明治一〇年一〇月) 一七日	一八七七	(立花種恭)	冊・墨書	1点	青色九行罫紙。表題は墨書端書より。	2-5
(親臨開業に際し小学男生徒総代祝詞)	(明治一〇年一〇月一七日カ)	一八七七	小学男生徒惣代	状・墨書	1点	青色九行罫紙。墨書「不用」端書あり。親臨開業式での小学男生徒総代は秋元興朝。	2-6
(親臨開業に際し校長祝詞)	(明治一〇年一〇月一七日カ)	一八七七	(立花種恭)	状(2枚)・墨書	1点	青色九行罫紙。朱読点あり。	2-7
(華族一同を代表し将校下士卒等への陳述・慰問・弔詞の覚書写)	明治二八年	一八九五	従三位侯爵 徳川篤敬・正三位勲二等子爵 長岡護美・正三位勲三等 醍醐忠敬	冊・墨書	1点	版心「潮音書屋」青色一〇行罫紙。内容：第一軍・第二軍・連合艦隊の將校下士卒諸君への陳述の覚書／傷痍疾病の將校下士卒諸君を慰問するの覚書／戦死者の墳墓を弔するの詞。	2-8
華族学校生徒課業	(明治一〇年カ)	一八七七	—	冊・墨書	1点	青色九行罫紙。学科ごとの組編成と人数、担当教師の書上。	2-9止

(3) 勅旨令旨及院長祝詞 (明治一〇一七一年、12点) ※各史料には立花種勝氏の整理によるという短冊あり

(包紙) 勅旨令旨九通	—	—	—	状・墨書	1点	組共。	3-0
(学習院一周年に際し院長祝詞、「斧斤音絶…」)	明治一一年一〇月一七日	一八七八	学習院長従五位 立花種恭	巻紙・墨書	1点	—	3-1

表題	年月日	西暦	作成・差出宛名・受取	形態・記述法	数量	備考	史料番号
(学習院一周年に際し副館長君の祝辞への答辞、「於威士女ラシテ」)	明治一一年一〇月一七日	一八七八	学習院長五位 立花種恭	巻紙・墨書	1点	「稿」端裏書あり。	32
(華族会館での新年祝詞、「歳華新二」)	明治一三年一月六日	一八八〇	学習院長五位 立花種恭	巻紙・墨書	1点		33
(華族会館での新年祝詞、「細流会同」)	明治一二年一月六日	一八七九	(学習院長 立花種恭)	巻紙・墨書	1点	虫損あり。	34
(華族会館での新年祝詞、「愛二ツノ大樹アリ」)	明治一六年一月六日	一八八三	学習院長五位 立花種恭	巻紙・墨書	1点	虫損甚大。	35
(華族会館での新年祝詞、「夫国土ノ大ナルハ」)	明治一七年一月六日	一八八四	学習院長五位 立花種恭	巻紙・墨書	1点		36
(華族会館での新年祝詞、「夫一点ノ水モ」)	明治一四年一月六日	一八八一	学習院長五位 立花種恭	巻紙・墨書	2点	同一文面二通(但し一方には訂正一カ所あり)。	37
勅旨(本校ヲ名ケテ学習院ト号ス)	(明治一〇年一〇月一七日)	一八七七	—	巻紙・墨書	1点	学習院大学図書館に同史料あり(勅旨令旨等「番号一」)。	38-1
皇后宮令旨(今日親しく此校に臨み主上の院号を賜ふ)	(明治一〇年一〇月一七日)	一八七七	—	巻紙・墨書	1点	学習院大学図書館に同史料あり(勅旨令旨等「番号二」)。	38-2
皇太后宮令旨(華族乃学校の業勩むる礼行ひし日)	(明治一〇年一〇月一八日)	一八七七	—	巻紙・墨書	2点	同一文面二通(但し筆跡は異なり、一方には「皇太后宮令旨」題字あり。学習院大学図書館に同史料あり(勅旨令旨等「番号三」)。	38-3
(勅旨・令旨の草稿)	(明治一〇年一〇月カ)	一八七七	—	巻紙・墨書	1点	38-1、38-2の勅旨・令旨三点の草稿。皇太后宮令旨の箇所には朱の訂正・ルビあり。	38-4
(臨幸・行啓に際しての勅詔・御詞御趣意)	明治一六年一月二二・二八日	一八八三	—	状・活字	1点		38-5止

(4) 祝辞並演説案(明治一〇〜一七年、21点)

(封筒) 祝辞並演説案	年月日	西暦	作成・差出宛名・受取	形態・記述法	数量	備考	史料番号
大宮奉答(学習院開業に際し皇太后令旨への答詞)	(明治一〇年一〇月一八日)	一八七七	(学習院長 立花種恭)	巻紙・墨書	1点	表題は端裏書より。	40
(書籍惠贈への感謝状)	明治九年六月	一八七六	華族会館副長 池田慶徳「印」〔華族会館之印〕 ↓立花種恭殿	巻紙・墨書	1点		42
(祝辞草稿綴)	—	—	—	綴	1綴		43
①(草稿、華族学校開校祝辞、「夫人世ノ社会ニ於ル」)	(明治一〇年九月三日)	一八七七	(立花種恭)	墨書	(2枚)	青色一〇行罫紙。墨書「九月廿三日夜調」端書あり。40の別稿カ。	43①
②第十五銀行著業式之節祝詞	明治一〇年二月八日	一八七七	学習院長五位 立花種恭	墨書	(1枚)	版心「学習院」青色九行罫紙。朱の訂正あり。表題・年月日は朱書端書より。	43②
③(草稿、華族会館での新年祝詞)	(明治一二年一月六日)	一八七九	(学習院長 立花種恭)	墨書	(1枚)	青色一〇行罫紙。成稿は38。	43③
④(草稿、華族会館天皇臨幸記念祝宴での祝詞)	(明治一三年一〇月七日)	一八八〇	(立花種恭)	墨書	(1枚)	朱の訂正など多数あり。文中に「于時明治十三年十月七日」抹消済」とあり。	43④
⑤(草稿、華族会館での新年祝詞)	(明治一四年一月六日)	一八八一	(立花種恭)	墨書	(1枚)	朱書「十四年一月六日会館ニ於而祝辞」端書あり。朱の訂正など多数あり。成稿は38。	43⑤
⑥(草稿、華族会館での新年祝詞)	(明治一五年一月六日)	一八八二	(立花種恭)	墨書	(2枚)	青色一〇行罫紙。墨書「十五年一月六日会館式祝辞案」端書あり。朱の訂正など多数あり。	43⑥



	表題	年月日	西暦	作成・差出↓宛名・受取	形態・記述法	数量	備考	史料 番号
	⑦ (草稿、華族会館での新年祝詞)	(明治一六年一月六日)	一八八三	(立花種恭)	墨書	(2枚)	版心「潮音書屋」青色一〇行罫紙。朱の訂正・付箋など多数あり。成稿は56。別草稿は47。	437
	⑧ 中山仲子初四人之女生徒全科卒業之面へ対セル祝辞	明治一六年二月二〇日	一八八三	(立花種恭)	墨書	(1枚)	版心「学習院」青色九行罫紙。表題・年月日は朱書端書より。	438
	⑨ (草稿、華族会館での新年祝詞)	(明治一七年一月六日)	一八八四	学習院長正五位 立花種恭	墨書	(2枚)	「金花堂」製青色一〇行罫紙。朱の訂正などあり。成稿は36。	439
	(草稿、寄宿舎開設に際する祝詞)	明治一二年九月八日	一八七八	(立花種恭)	冊・墨書	1点	青色一〇行罫紙。朱の訂正などあり。	44
	(草稿、親臨開業式三週年紀念の祝詞)	(明治一三年一〇月一八日)	一八八〇	(立花種恭)	状・墨書	1点	青色一〇行罫紙。朱の訂正など多数あり。	45
	(草稿、華族学校開校に際する祝辞)	(明治一〇年六月一日)	一八七七	(立花種恭)	状・墨書	1点	青色九行罫紙。朱の訂正多数あり。	46
	(草稿、証書授与畢り暑中休暇に際し諸君への演説)	明治一六年七月一四日土曜日	一八八三	(立花種恭)	冊・墨書	1点	版心「学習院」青色九行罫紙。朱の訂正などあり。	47
	(草稿、華族学校開校祝辞、「夫人才ニ敏鈍アル」)	(明治一〇年カ)	一八七七	(立花種恭)	状・墨書	1点	青色九行罫紙。墨書「不用」端書あり。朱読点などあり。43①の別稿カ。	48
	(草稿(漢文)、華族会館での新年祝詞)	(明治一二年一月六日)	一八七九	(学習院長 立花種恭)	状・朱書	1点	版心「学習院」青色九行罫紙。成稿は34。別草稿は43③。	49
	(草稿、華族会館での新年祝詞)	(明治一四年一月六日)	一八八一	(立花種恭)	状・墨書	1点	版心「潮屋書屋」青色20×20字原稿用紙。後欠カ。成稿は37。別草稿は43⑤・411。	410
	(草稿、華族会館での新年祝詞)	(明治一四年一月六日)	一八八一	(立花種恭)	状・墨書	1点	青色一〇行罫紙。朱の訂正など多数あり。成稿は37。別草稿は43⑤・410。	411
	(草稿、華族会館での新年祝詞)	(明治一六年一月六日)	一八八三	(立花種恭)	状・墨書	1点	「十二年一月六日会館祝詞稿不用分」端書あり。成稿は35。別草稿は43⑦。	412
	(草稿、休暇後受業始めにつき演説)	(明治一四年九月カ)	一八八一	(立花種恭)	状・墨書	1点	後欠。文中に「今般教則ノ改正ハ文部ノ意ニ基キ先第一ニ修身ノ課ヲ置ク」とあり、年代を推定した。	413
	(草稿、親臨開業式四週年紀念の祝詞)	(明治一四年一〇月カ)	一八八一	(立花種恭)	状・墨書	1点	版心「潮屋書屋」青色20×20字原稿用紙。後欠。	414
	(草稿、紅葉館に於る同族親睦会での祝辞)	—	—	(立花種恭)	墨書	1点		415
	女生徒之向へ(卒業証書渡しにつき)	—	—	(立花種恭)	状(2枚)・墨書	1点	青色一〇行罫紙。	416
	十五年一月廿七日脩身演説稿	明治一五年一月二七日	一八八二	(立花種恭)	冊・墨書	1点	表題は朱書端書より。	417
	(草稿、研修科諸君の卒業につき祝辞)	明治一七年七月一五日	一八八四	(立花種恭)	冊・墨書	1点	朱の訂正などあり。	418
	(草稿、本年授業始めにつき演説)	明治一七年一月一日	一八八四	(立花種恭)	冊・墨書	1点	版心「学習院」青色九行罫紙。	419
	(期末・授業初の演説草稿など綴)	—	—	—	綴	1綴		420
	① (草稿、期末大試験後の生徒諸君への演説)	—	—	(立花種恭)	墨書	(2枚)	朱の訂正などあり。	420①
	② (草稿、一月受業初に膺り演説)	明治一二年二月二三日	一八七八	(立花種恭)	墨書	(2枚)	青色一〇行罫紙。末尾欄外に「十一年十二月廿三日夜十二時三十分之後草之」とあり。	420②
	③ 入舎生ノ為演説腹稿概畧	明治一二年九月八日	一八七八	(立花種恭)	墨書	(3枚)	青色一〇行罫紙。表題は墨書端書より。	420③
	④ 会館祝席ニ於る演説セシ腹稿畧(「夫人ノ快樂トスル所」)	明治一二年一〇月七日	一八七八	(立花種恭)	墨書	(2枚)	青色一〇行罫紙。表題は墨書端書より。	420④

表題	年月日	西暦	作成・差出↓宛名・受取	形態・記述法	数量	備考	史料 番号
⑤明治十五年開業親臨四週紀念祝宴席之祝詞高	(明治一五年一〇月カ)	一八八二	(立花種恭)	墨書	(1枚)	朱の訂正など多数。表題は末尾書込より。「不用シテ止ム」末尾書込もあり。	420⑤
⑥(草稿、開業親臨四週紀念の祝詞)	(明治一四年一月一七日)	一八八一	(立花種恭)	墨書	(4枚)	朱の訂正など多数。	420⑥
⑦(草稿、開業親臨四週紀念の祝詞)	(明治一四年一月一七日)	一八八一	(立花種恭)	墨書	(1枚)	青色一〇行罫紙。	420⑦
⑧(草稿、開業親臨三週紀念の祝詞)	(明治一三年一〇月カ)	一八八〇	(立花種恭)	墨書	(3枚)	青色一〇行罫紙。朱書「明治十三年記念式演述」端書あり。	420⑧
⑨(草稿、受業始めの演説)	明治一四年一月一七日	一八八一	(立花種恭)	墨書	(2枚)	青色一〇行罫紙。朱の訂正などあり。	420⑨
⑩(草稿、開業親臨四週紀念の祝詞)	(明治一四年一月一七日)	一八八一	(立花種恭)	墨書	(4枚)	青色一〇行罫紙。訂正は数カ所のみ。	420⑩
⑪四ツ谷御苑学校初而証書渡シ之節演説高	明治一四年一月二四日	一八八一	(立花種恭)	墨書	(4枚)	表題は朱書端書より。朱書「但不用ニして止ム」端書もあり。	420⑪
⑫受業始演説高	明治一五年一月一日	一八八二	立花種恭稿	墨書	(5枚)	青色一〇行罫紙。表題は墨書端書より。朱書「一印ハ四ツ谷御苑学問所ノ為ニス」端書もあり。	420⑫
⑬各級卒業証書授与ノ後演説高	明治一五年二月二〇日	一八八二	(立花種恭)	墨書	(3枚)	表題は墨書端書より。虫損あり。	420⑬
⑭四ツ谷御苑学校生徒第二回昇級証書渡ノ節演説	明治一五年三月三日	一八八二	(立花種恭)	墨書	(2枚)	版心「学習院」青色九行罫紙。表題は墨書端書より。虫損あり。	420⑭
⑮実文学生全科卒業之式ニ、右卒業生ヘ対シ演説稿	明治一五年七月一五日	一八八二	(立花種恭)	墨書	(3枚)	版心「潮音書屋」青色一〇行罫紙。表題は朱書端書より。	420⑮
⑯書器室建築落成シ今日之ヲ開クニ付祝詞旁聊思想ヲ述	明治一六年一月一日	一八八三	(立花種恭)	墨書	(4枚)	虫損あり。文中に「今本院館蔵ノ書籍ハ(中略)右惣合計卷万五千五百五十三冊也」とあり。	420⑯
⑰進級証書授与ノ後演説覚書	明治一七年二月二〇日	一八八四	(立花種恭)	墨書	(1枚)	版心「学習院」青色九行罫紙。	420⑰
(開業式入費の書上)	(明治一〇年)	一八七七	—	状・墨書	1点	青色九行罫紙。墨書「学校最初開業式入費館長ト面談候也」端書あり。	421止

(5) 学習院備忘ほか (明治一〇〇一四年、4点)

学習院備忘	明治一二年一月〜二月	一八七八	(立花種恭)	和綴本・墨書	1点	版心「学習院」青色九行罫紙を使用。挟込九点あり。内容は、立花種恭院長の校務日誌。	51
学習院備忘	明治一二年	一八七九	(立花種恭)	和綴本・墨書	1点	版心「学習院」青色九行罫紙を使用。挟込二点あり。内容は、立花種恭院長の校務日誌。	52
十一月十七日学習院演説	(明治一四年)十一月一七日	一八八一	西村茂樹	冊・墨書	1点	版心「学習院」青色九行罫紙。24と同一。	53
(開業式準備に関する立花院長日誌)	(明治一〇年九〜一〇月)	一八七七	—	冊・墨書	1点	青色九行罫紙。	54止

(6) 立花種恭苑書簡 (明治一〇〇一二年、17点) ※各史料には立花種勝氏の整理によるという短冊あり。

(書簡、閑院宮陸軍幼年学校に御入学につき)	(明治一一年)二月二一日	一八七八	徳大寺実則 ↓立花種恭殿	巻紙・墨書	1通	封筒共(表に朱書「三」付箋あり)。61と関連カ。	61
(書簡、御院の卒業証書授与へ不参)	二月二〇日	—	岩倉具視 ↓立花種恭殿	巻紙・墨書	1通	封筒共(表に朱書「三」付箋あり)。	62
(書簡、本日午後部長の人々入来囲碁会相催につき)	三月一九日	—	岩倉具視 ↓立花種恭殿	巻紙・墨書	1通	封筒共(表に朱書「四」付箋あり、裏に足し算の筆算書込あり)。	63
(書簡、開成学校地処之儀田中へ掛合の処多分六ヶ敷返答)	(明治一〇年カ)二月一三日	一八七七	岩倉具視 ↓立花種恭殿	巻紙・墨書	1通	封筒共(表に朱書「二」付箋あり)。田中は田中不二麿文部大輔カ。	64

表題	年月日	西暦	作成・差出↓宛名・受取	形態・記述法	数量	備考	史料番号
(書簡、昨日御申越之儀陸奥江申遣之処別紙之通回答有之)	(明治一〇年)五月二九日	一八七七	岩倉具視 ↓立花種恭殿	巻紙・墨書	1通	封筒共(糊剥離。表に朱書「小野」、裏に朱書「六」あり。端裏に朱書「六」付箋あり。別紙はG7カ。	G5
(書簡、子息遠吉につき御配慮を深謝)	二月二三日	—	大木喬任 ↓立花種恭殿	巻紙・墨書	1通	封筒共。	G6
(書簡、亡父之儀御尋問拝謝、フルベッキ氏一条につき立花氏の一書も承知)	(明治一〇年)五月二九日	一八七七	陸奥宗光 ↓岩倉(具視)公侍史	巻紙・墨書	1通	封筒共。G5の別紙カ。	G7
(書簡、虎ノ門内学習院建物帝國博物館へ引渡之後該地処南端ニ華族会館設置之件)	(明治二二年カ)二月七日	一八八九	杉孫七郎(内蔵寮) ↓立花(種恭)爵位局)	巻紙・墨書	1通	封筒共。	G8
(書簡、山口県士族谷春雄六戸鬼熊兩人学修院入学につき)	一月二九日	—	杉孫七郎(東京麹町平河町五丁目十八番地) ↓立花(種恭)公閣下(学習院)	巻紙・墨書	1通	封筒共。	G9
(書簡、来二月一日新年宴の御招請申入度)	一月二三日	—	岩倉具視 ↓立花種恭殿	巻紙・墨書	1通	封筒共(表に朱書「七」付箋あり)。	G10
(書簡、来る廿一日各部長相招懇会相催の案内)	四月二〇日	—	岩倉具視 ↓立花種恭殿	巻紙・墨書	1通	封筒共(表に朱書「五」付箋あり)。	G11
(書簡、明日臨幸につき)	(明治一六年)一月二〇日	一八八三	(二条)実美 ↓立花種恭殿	巻紙・墨書	1通	封筒共(表に朱書「五」付箋あり)。	G12
(書簡、元老院幹事陸奥宗光子廣吉潤吉兩人が来る二七日入学試験のため出院につき)	(明治一一年カ)三月二四日	一八七八	柳原前光(築地式丁目廿五番地) ↓立花種恭殿(深川東元町五番地)	巻紙・墨書	1通	封筒共(表に消印あり、但し年は不鮮明)。陸奥の元老院幹事就任期間は明治八年四月、同一一年六月。	G13
(書簡、新造軍艦出来の拝観につき学校役員へ御達ありたい)	(明治一一年カ)七月一日	一八七八	(岩倉)具視 ↓立花(種恭)院長殿	巻紙・墨書	1通	端裏に朱書「十」付箋あり。新造軍艦とは扶桑・比叡・金剛のこと。	G14
(書簡、両宮の賞品差上につき三好慎蔵西尾兩士へ御尋問されては如何)	(明治一一年)二月二〇日	一八七八	徳大寺実則 ↓立花種恭殿	巻紙・墨書	1通	封筒共。三吉慎蔵は北白川宮家令、西尾為忠は閑院宮家令。G2と関連カ。	G15
(書簡、西京平民にて学習院へ入門いたし度旨志願につき御尋)	(明治一七年)四月七日	一八八四	西園寺公望(木挽町一丁目五番地) ↓立花(種恭)院長殿(神田錦町学習院ニ於テ)	巻紙・墨書	1通	封筒共(消印「東京/一七・四・七」、表に朱書「十三」付箋あり)。	G16
(書簡、本日宮内省で学習院の現状及意見を拝承仕度)	(明治一七年カ)五月六日	一八八四	(伊藤)博文 ↓立花(種恭)公(正五位殿)	巻紙・墨書	1通	封筒共(「至急」)。	G17止

